日本の演奏家がもっと海外で自分の心を表現してほしい そんなフルートを作りたい

人 HITO

曽根　勝さん
（フルート制作者）

仕上がり状態を確認しながら、『歌口』にヤスリをかけていきます。「同じ材質でも加工する工程の中で、微妙に違いが出てきます。管の密度、重さ、厚みは１本１本変わってくるんです。」と曽根さん。

北入曽にお住まいの曽根　勝さんは、フルートのトップブランド「村松フルート」で制作に携わって43年になります。ベルリンフィルやウィーンフィルなど、世界的なオーケストラの奏者の多くが、曽根さんの作品の愛用者です。制作工程の中で曽根さんが主に担当するのは、息を吹き込む『歌口』の部分。フルートの命とも言える音色を左右する大切なパーツです。この歌口を、永年培ってきた技術と経験で、目の細かなヤスリをかけて100分の1ミリの精度で仕上げていきます。それはまさに「職人技」が求められる、最も重要な作業です。そしてこれこそが多くの奏者に「何年待ってでも、曽根さんの手掛けたフルートを」と言わしめる由縁（ゆえん）です。

曽根さんとフルートの出会いは、岡山県倉敷東中学校で入部したオーケストラでした。オーケストラにはフルートが1本しかなく、2年生でやっと手にすることができたのですが、ちゃんとした音が出ませんでした。修理して音が出るようになると、曽根さんは楽器を自分で作ってみたいと思うようになりました。「職人」という言葉を意識しだしたのも、このころだそうです。そして楽器を作るために機械のことを学ぼうと工業高校に進学しました。また、奏者としても才能を発揮していた曽根さんは、高校在学中にNHK岡山放送響に在籍し、全国吹奏楽個人コンクールで1位になったほどです。

しかし、曽根さんは奏者よりも「職人」という言葉にひかれ、卒業と同時に東京芸術大学で学びながら村松フルートの創業者、村松孝一氏に弟子入りしたのでした。「大学でよい仲間に恵まれました。いつも楽器の話をしていて、いつかは自分でもよい楽器を作ろうと思いました。」と曽根さんは当時を振り返ります。そんな矢先、弟子入りして2年で突然先代が亡くなってしまいました。その時は「村松は、おしまいか」と思ったそうです。東洋の島国で作った西洋の楽器など相手にされないのではないかと心配した曽根さんは、国内の演奏家に手紙を出しました。「吉田雅夫先生が自分の笛を持ってアドバイスに来てくれたんです。それまでは寸法の正確さやヤスリ仕上げに力を入れていましたが、楽器を作るためには、ほかにもいろいろな要素が必要であることを教えてくださいました。」と話します。また、「楽器は置物でもおもちゃでもいけません。自分で考え、気に入るように作ってこそ初めて魂が入り、自分の個性が出せるんです。私は奏者にも吹き方をアドバイスしますし、奏者も指摘してくれます。そして、楽器を作ってくれる人のために演奏会を開いてくれる奏者もいます。それが信頼関係の表れなんです。」と現場の大切さを知っている曽根さんならではの言葉です。

曽根さんの一番の趣味は、へらぶな釣り。「静かな所で『浮き』に集中すると気分転換になり、リフレッシュできるんです。」とおっしゃいます。

最後に、フルート作りの魅力を伺うと、「楽器を作るだけでなく、プレイヤーを育てること。自分で作ったものが、音楽になって自分に跳ねかえってきた時には感動します。」と話してくださいました。そして、若手の社員が思いがけない素晴らしい音を作るのを楽しみにしているそうです。「年齢とともに聞こえる音も変わるものです。自分の中では毎日が勉強、終わりはありません。」と曽根さん。これからも魅力的な音色を世界中に送り出してくれることでしょう。

みんなでワイワイ子育てしよう！ 乳幼児情報センターは 子育ての良きパートナーです

REPORTER'S EYE

乳幼児情報センター

【リポーター】
石川香奈栄さん（入間川在住）

リポーターズアイでは、行政のしくみや話題性のあることがら、市内のいろいろな施設などを、読者がリポートします。

カメラに向かってサービスポーズ。おもちゃがいっぱいで、私もお友だちもご機嫌なの。だから毎日遊びに来ているんだ。

毎日、お兄ちゃんを幼稚園に送り出してから、下の子と密着した時間が始まります。2歳の男の子で、家に居ると飽きてしまうし、かといって今の時期、公園などの屋外では暑くて遊べません。そんなときに広報紙で目についたのが、乳幼児情報センターオープンの記事。早速オープンの日に遊びに行ってみました。狭山市駅から子ども連れでゆっくり歩いても10分程度、ベビーカーで親のペースで歩けば7～8分の、狭山郵便局斜め前に、そのビルはありました。センターがある3階にエレベーターで上がると、笑顔の女性が数人、「こんにちは。」と私と息子に挨拶してくれます。招き入れられるままに入って行くと、三方を窓に囲まれた、明るい20畳ほどの広々としたスペースがありました。ここは子どもたちが自由に遊べる場所のようです。棚には手作りのおもちゃや絵本がたくさん並び、息子はおもちゃを次々と引っ張り出して、すぐに遊び始めました。そうこうするうちに、一人、また一人と同じ位の年齢のお子さんを連れたお母さんが集まってきます。皆さん、入ってくるなり「わぁ、涼しくていいね。」「手作りのおもちゃがたくさんあって、楽しそう。」と感激しているようです。お互い、自然に子どもの名前や年齢を教え合い、ふだん子どもを連れて遊びに行く場所や発育の様子などを情報交換しました。

センターの矢島所長さんに、この乳幼児情報センターが開所した経緯を伺うと、家庭で子育てをしている母親が孤立しないように、そして育児のストレスや不安を少しでも和らげるために育児に関する情報提供ができるようにと、できたのだそうです。常時数名の保育士資格を持つ職員がいて、子どものちょっとしたしぐさや母親同士の会話などから、子育てのアドバイスをそれとなくしてくださいます。また、母親同士の会話でも、子どもに関する心配ごとが、気にするほどのことではないと分かったりして、気が楽になりました。また、職員の皆さんのアドバイスも押し付けではなく、「こんなケースもあるよ。」「こんな子もいたよ。」と一緒に考えてくださり、とても信頼できます。まるで、子育てを自分一人で抱え込んでいるのではなく、みんなで一緒にしているような気持ちになります。

ぼくは電車が大好き。電車のおもちゃが一番のお気に入りなんだ。

乳幼児情報センターは、月曜日から土曜日まで、毎日9時30分～16時30分に開設しています。0歳児から就学前のお子さんまで利用できるので、幼稚園が終わってから下の子と一緒に遊びに行くこともできると思いました。さらに、利用料金などがかからないのも、うれしいですね。それから、ちょっとした悩みや不安などを気軽に聞くことができる専用電話による子育て相談（☎958－1054）や、市内の公園・保育所の庭で開催する「ワイワイ広場」などの事業も行っています。

皆さんも、子育てを今以上に楽しむために、自分のペースで積極的に活用してみてはいかがですか。

●問い合わせ乳幼児情報センター（富士見1－14－11 北野第2ビル3階）へ☎958－1155